

## 注 記

注記中に出てくる生物及び生物群の学名・和名・分類上の所属等については、主として「岩波 生物学辞典 第5版 (岩波書店, 2012年)」に従い、「新日本動物図鑑[上][中][下] (北隆館, 1965年)」「谷津内田 動物分類名辞典 (中山書店, 1972年)」「原色検索日本海岸動物図鑑[I][II] (保育社, 1992, 1995年)」「生物学辞典 (東京化学同人, 2010年)」、また WoRMS, BISMAL 等のオンラインリソースを適宜参考とした。

### 瀬戸臨海実験所年誌 (原田英司)

- (1) その後 1998 (平成 10) 年に大学院化し、理学研究科附属瀬戸臨海実験所に改称。更に 2003 (平成 15) 年に、フィールド科学教育研究センター所属へと改組された。
- (2) 実験所創設 70 周年は 1992 (平成 4) 年。京都大学創設百周年は 1997 年 (平成 9 年)。結局当初の予定より 20 年以上遅れての出版ということになった。
- (3) 謝辞に相当する文章は、遺されたファイル中には見当たらなかった。
- (4) 1997 (平成 9) 年 7 月 28 日。7 月 28 日は、1922 年に実験所の開所式が行われた日付でもある。
- (5) ニハイチュウ (菱形動物門) の属名。タコなどの頭足類の腎臓に寄生する。
- (6) 他のページの記述から、給水ポンプ及びタンクのブランドもしくはメーカー名らしい。
- (7) ラップウニ (棘皮動物門: ウニ綱) の属名。
- (8) ガンガゼ (棘皮動物門: ウニ綱) の属名。
- (9) ヒザラガイ類 (軟体動物門: 多板綱) の英語名。注記 (10) 参照。
- (10) タテジマウミウシ科 (Arminidae) に属する *Pleurophillidia* 属 (現在はタテジマウミウシ属 *Armina* にシノニム化)。本文中の註にもあるように、当初 "chiton" と表記されたものに、後にウミウシ類の一種として訂正が書き込まれている。
- (11) イラモ (刺胞動物門: 鉢虫綱) の属名。古くより刺胞毒による被害が知られていたが、瀬戸臨海実験所初代所長であった駒井卓が実験所近辺の個体群について研究し、1936 (昭和 11) 年に、イラモ *Stephanoscyphus racemosum* として新種記載した。
- (12) ワダツミギボシムシ (半索動物門: ギボシムシ綱) の属名。瀬戸臨海実験所の実験地である島島の西岸砂地に、ワダツミギボシムシの群落がある。
- (13) ドレッジの水深ということで、ファズム (fathom) の複数と思われる。1 ファズム = 6 フィート  $\approx$  1.83 メートルなので、50 ファズムは約 90 メートルになる。
- (14) イワヅタ (緑藻植物門: アオサ藻綱) の属名。
- (15) ヒバリガイ (軟体動物門: 二枚貝綱) の属名。現在は *Modiolus* にシノニム化。
- (16) *Porpita* ギンカクラゲ属 (刺胞動物門: ヒドロ虫綱) の誤記と考えられる。
- (17) *Physaria* カツオノエボシ属 (刺胞動物門: ヒドロ虫綱) の誤記と考えられる。
- (18) カツオノカンムリ (刺胞動物門: ヒドロ虫綱) の属名。

- (19) アサガオガイ（軟体動物門：腹足綱）の属名。この類は浮遊性の巻貝で、浮き袋を出し沈まないことから、瀬戸臨海実験所所属船舶の船名に代々用いられており、現在の「ヤンチナ」は4代目にあたる。
- (20) フィロゾーマ幼生。イセエビ類やセミエビ類（節足動物門：甲殻亜門）の浮遊期幼生。
- (21) 浮遊性の *Phylliroe* コノハウミウシ属のウミウシ（軟体動物門：腹足綱）。
- (22) ギンカクラゲ（刺胞動物門：ヒドロ虫綱）の属名。
- (23) ヒザラガイ（軟体動物門：多板綱）。
- (24) オオイカリナマコ（棘皮動物門：ナマコ綱）の属名。しかしこの属は、瀬戸臨海実験所周辺を含む紀伊半島には分布しない。
- (25) ウミサボテン（刺胞動物門：花虫綱）の属名。
- (26) アワビ（軟体動物門：腹足綱）の属名。
- (27) カメノテ（節足動物門：甲殻亜門）の属名。現在の学名は *Capitulum mitella*。
- (28) ドイツ語で藻類の意。
- (29) シオグサ（緑藻動物門：アオサ藻綱）の属名。
- (30) カツオノエボシ（刺胞動物門：ヒドロ虫綱）の属名。
- (31) いわゆる「奄美大島台風」と思われる。「734.5 ミリ」とあるのは、734.5 mmHg $\approx$ 979 hPa。
- (32) 瀬戸臨海研究所のこと。
- (33) この一般公開をもって、京都大学白浜水族館の創立記念日とする。
- (34) キンコ（棘皮動物門：ナマコ綱）の属名。
- (35) ハナガサクラゲ（刺胞動物門：ヒドロ虫綱）。
- (36) 放射水管。クラゲの傘の中央を占める胃腔から周辺に向けて放射状に伸びる、循環系の役割を持つ管。
- (37) タカアシガニ（節足動物門：甲殻亜門）。現在の学名は *Macrocheira kaempferi*（現行の国際動物命名規約では、種小名は全て小文字で表記する）。
- (38) クラゲエボシ（節足動物門：甲殻亜門）。
- (39) ウズマキゴカイ（環形動物門：多毛綱）の属名。
- (40) フジツボ属（節足動物門：甲殻亜門）。
- (41) ヒトエカンザシ（環形動物門：多毛綱）の属名。
- (42) フジツボ類の殻板を構成する板の一つである「峰板」。
- (43) サラフジツボ（節足動物門：甲殻亜門）。サラフジツボはウミガメ類に付着するフジツボの一種。
- (44) シャーレ。
- (45) ドイツ語で交接・交尾の意。
- (46) フランスの海洋生物学者 Jean Abel Gruvel。
- (47) リン酸塩。
- (48) 採水瓶の種類であろうが不詳。
- (49) 等脚類（節足動物門：甲殻亜門）。
- (50) ドイツ語で計数の意。

- (51) ポリプ。すなわち刺胞動物の固着生活型。
- (52) イラモの細胞を何らかの方法で分離させ、それらの再凝縮を観察する実験と思われる。
- (53) カサネカンザシ属 (環形動物門：多毛綱)。
- (54) 鰓蓋。カンザシゴカイ類が棲管に引っ込んだ際に、蓋の役割をする構造。
- (55) 代償性再生。組織や器官の一部を切除後、残りの部分が肥大化することにより元の大きさに回復するような再生の様式。
- (56) ホウキムシ (箒虫動物門)。
- (57) 現在の「京大白浜海の家」。
- (58) 深海性ヒトデ。
- (59) ミズクラゲ (刺胞動物門：鉢虫綱)。
- (60) エフィラ。刺胞動物門、鉢虫綱の有性世代であるクラゲの幼若個体。
- (61) アカクラゲ (刺胞動物門：鉢虫綱) の属名。現在の属名は *Chrysaora*。
- (62) 季節遷移。もともとは植物群落の組成やそれが作る様相 (相観) の季節による変化。潮だまり (タイドプール) の場合、動物相を含めて対象とすることが多い。
- (63) トガリサルバ (脊索動物門：タリア綱)。
- (64) コアミケイソウ (オクロ植物門：珪藻綱) の属名。
- (65) タテジマイソギンチャク (刺胞動物門：花虫綱)。現在は *Haliplanella lineata* にシノニム化。
- (66) サンショウウオ属 (脊索動物門：両生綱)。分布と卵採集の容易さから、カスミサンショウウオ *Hynobius nebulosus* と思われる。
- (67) イワムシ (環形動物門：多毛綱)。現在は *Marphysa sanguinea* にシノニム化。
- (68) クロナマコ (棘皮動物門：ナマコ綱)。ただしこの種は、瀬戸臨海実験所周辺を含む紀伊半島には分布しないことから、ニセクロナマコ *Holothuria leucospilota* のことと思われる。
- (69) 当時フジナマコ (棘皮動物門：ナマコ綱) の和名が当てられていたナマコの一つ。「フジナマコ」の学名・和名・掲載文献中の情報には分類学的な混乱があり、この種はフジナマコ *Holothuria (Thymiosycia) decorata* もしくはイソナマコ *Holothuria (Lessonothuria) pardalis* の可能性が高い。
- (70) ムラサキクルマナマコ (棘皮動物門：ナマコ綱)。
- (71) マナマコ属 (棘皮動物門：ナマコ綱) の一種。ただしこの属で、*rufescens* の種小名を持つものはいない。
- (72) エボシガイ (節足動物門：甲殻亜門)。
- (73) ルリエボシ (節足動物門：甲殻亜門)。
- (74) 内肛動物門。スズコケムシやウミウドンゲの仲間。
- (75) *Barentsia misakiensis* スズコケムシ (内肛動物門) の誤記と考えられる。現在は *Barentsia discreta* にシノニム化。
- (76) ドフライン編集の "Beiträge zur naturgeschichte Ostasiens" のフジツボ類の部 "Beiträge zur Cirripedenfauna Ostasiens" (Krüger, 1911) を執筆した動物学者 Paul Krüger のこと。注記(87)参照。

- (77) ミナミクロフジツボ (節足動物門：甲殻亜門) の学名。注記(78)参照。
- (78) ミナミクロフジツボ (節足動物門：甲殻亜門) とされたものは、現在 *Tetraclita kuroshioensis* という学名になっている。
- (79) クロフジツボ (節足動物門甲殻亜門)。現在は *Tetraclita japonica japonica* という学名で呼ばれている。
- (80) *Barentsia* スズコケムシ属 (内肛動物門) の誤記と考えられる。注記(75)参照。
- (81) イワフジツボ (節足動物門：甲殻亜門)。
- (82) オオイワフジツボ (節足動物門：甲殻亜門)。現在は *Hexechamaesipho pilsbryi*。
- (83) この文章はここで切れているが、日誌には「海ノ知識ト水産品展覧会」ヲ催スニツキ、本研究所ノ出品ヲ懇請シテキタ。」と続く。
- (84) *Serpula* ヒトエカンザシ属 (環形動物門：多毛綱) のことであろう。注記(41)参照。
- (85) 「大島の亜熱帯生物研究所」とは、京都帝国大学大島暖帯植物試験地 (現在の京都大学フィールド科学教育研究センター紀伊大島実験所) のこと。1940 (昭和15) 年4月1日に正式に開所した。
- (86) ショウジョウバエの一種 (節足動物門：昆虫綱)。現在は複数種を含むトラフショウジョウバエ種群 *Drosophila montium* sp. subgroup として扱われている。
- (87) ドイツの動物学者フランツ・ドフライン(Franz Theodor Doflein)。1904 (明治37) 年から1905 (明治38) 年にかけて日本に滞在し、多数の生物標本を持ち帰った。この標本群を用いた分類学的研究が、日本の動物分類学の礎の一つと評価されている。「ドフラインの本」とは、瀬戸臨海実験所図書室に所蔵があるドフライン編集の"Beiträge zur naturgeschichte Ostasiens"のコシオリエビ類及びヤドカリ類の部"Ostasiatische Decapoden I. Die Galatheiden und Paguriden" (Balss, 1913)と考えられる。
- (88) *Pylocheles* カレイシヤドカリ属 (節足動物門：甲殻亜門) の誤記と考えられる。
- (89) ツノガイヤドカリ科 Pylochelidae に属するヤドカリ類の一属 (節足動物門：甲殻亜門)。
- (90) ヤコウチュウ (渦鞭毛虫門) の属名。
- (91) トルナリア幼生。間接発生をするギボシムシ類 (半索動物門) が出す浮遊幼生。
- (92) ウンモンフクロムシ属 (節足動物門：甲殻亜門)。潮間帯のカニ類の腹部にしばしば寄生する。
- (93) ゾウクラゲ属 (軟体動物門：腹足綱)。
- (94) 松本敏三は当時京都帝大教授の数学者なので、カッコ内には「数学」と入れるべきであろう。
- (95) フナクイムシ (軟体動物門：二枚貝綱)
- (96) いわゆる「昭和東南海地震」。ただし公式記録では、この地震の発生時刻は13時35分。

### 実験所誌番外編（小林直正）

- (1) その後電子顕微鏡は撤去され、現在は学習スペースとして使われている。
- (2) 現在は倉庫として使われている。
- (3) 財団法人京都理化学研究協会は2010（平成22）年6月30日をもって解散した。
- (4) 現在、番所山の再整備化が進行している。
- (5) 水族館3階の標本室にあった魚類標本のほとんどは、2000（平成12）年12月19日に京都大学総合博物館に移管された。ただしラブカとオオウナギの標本については、現在も水族館で保有している。
- (6) 現在の正式名称は「京都大学白浜海の家」で、京大学生センターの管轄下にある。
- (7) 特定外来生物であるカダヤシが繁殖していたため、2006（平成18）年11月15日に意図的に干上がらせた。
- (8) 山路氏の没年については、瀬戸臨海実験所元技術職員の榎山嘉郎氏より情報提供を受けた。

### 白浜水族館史（荒賀忠一）

- (1) 原田氏は2009（平成21）年1月29日、奥野氏は2010（平成22）年1月23日、それぞれ鬼籍に入られた。
- (2) その後、電子顕微鏡も撤去された。
- (3) 魚類標本と同じく、2000（平成12）年12月19日に京都大学総合博物館に移管された。
- (4) 当該工事は、2009（平成21）年11月18日から翌年3月8日までの工期で行われ、その間、2010年（平成22）2月1日から同月17日まで休館した。また耐震工事のため、2013年（平成25）年11月1日より約半年間の予定で休館している。